

第5学年 道徳学習指導案

日 時 平成15年10月29日(水) 5校時

場 所 釜石市立甲子小学校 5年2組教室

学 級 5年2組 男12名 女13名 計25名

指導者 高橋昭雄

- I 主題名 約束や規則の尊重 【4-(2) 規則の尊重】
資料名 「星野君の二るい打」 (出典 東京書籍 道徳『希望をもって』)

2 主題設定の理由

(1) 価値について

指導内容4-(2)は、主として集団や社会とのかかわりに関することであり、「公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。」という項目である。

人間として、社会生活を送る上でルールや基本的なモラルなどの倫理観を育成することは、重要なことである。そのため、児童なりにルールやモラルの意味を理解し、きまりを守ろうとする意識を育てていくことが必要である。また、それに関連して、他人の権利を尊重しながらも、自分の権利を正しく主張するとともに、自他の立場を認識し、自覚し、自分に課された義務をしっかりと果たす態度を育成することも重要である。

(2) 児童について

男女比がバランスよく、異性間も比較的仲がよい。1学期は、学級編成後ということもあり、自分の考えを積極的に発言する児童は多くなかった。これまで、互いの意見を尊重し合うようにし、自分の考えをみんなの前で話すことができるようになってきた。また、ある特定児童への嫌がらせ・公共物への落書き等も1学期に経験し、話し合いを経て解決させ成長してきた。

きまりを守ろうとしている児童は、比較的多いと思われるが、きまりが何のためにあるのかを正しく理解し、いつも意識して行動する児童は少ない。きまりだからという理由で、きまりを守っている児童が意外に多い。

(3) 資料について

星野は、監督からバントの命令のサインを受ける。打てそうだった星野は曖昧な返事をして、打席に入る。サインを破りヒットを打ち、結果として勝利し、郡内野球選手権大会出場が決まった。試合の翌日、監督から命令に従わなかったことで星野は、非難される。

監督と選手という立場の違いからくる拘束感、試合に勝つという共通の目標、集団競技について、児童が主人公を自分に置き換えてとらえやすい資料である。また、勝てばいいと短絡的

にとらえてしまいがちな児童達に、集団生活・集団行動におけるめあてや規則きまりがなぜあるのか、なぜ必要なのかについて深く考えさせることができる資料である。

(4) 本時の指導について

① 導入について

導入においては、学級で自分たちできまりを作ることが多いため、学級にはどんなきまりがあるかに限定し、振り返り、価値への方向付けを図る。

② 展開について

展開においては、主人公の立場と監督の立場をきちんと捉えた上で、資料を与え、心情を読み取っていきたい。特に、試合に勝ちたいという思いと、監督の思い描く目標は強く捉えさせ、ねらいとする価値に迫っていく。やや長文であるため、3つの場面に分け、その場面ごとに主人公の心情に迫っていく。後段では、きまりは何のためにあるのかを目標やめあてを踏まえた上で考えさせ価値の自覚を深めたい。

③ 終末について

終末においては、5年生になってからの生活を振り返り、身近なきまりについても、何のためにあるのかを学級目標と併せて、この機会に考えさせ理解させるような話をする。

(5) 本時の評価について

① 座席表を活用する。座席表に、日常の観察をもとにした発言力や表現力などの[普段の生活の様子][自分の考えがもてるか][本時の目指す道徳的価値についてのこれまでの様子]について、担任が123により表記しておき、意図的な指名や評価に活用する。児童の1時間での道徳性の変容よりも、授業前の担任の実態把握という面に重きを置く。

② 本時のねらいとする道徳的な価値に照らして、評価規準を作る。児童が評価基準に到達した段階を価値に気づいたとし、ねらいが達成されたものと判断する。到達できたかどうかは、授業中の発言や記述により判断する。到達しなかった児童は、担任が把握し、日常指導やその後の道徳の時間等において指導していく資料としたい。

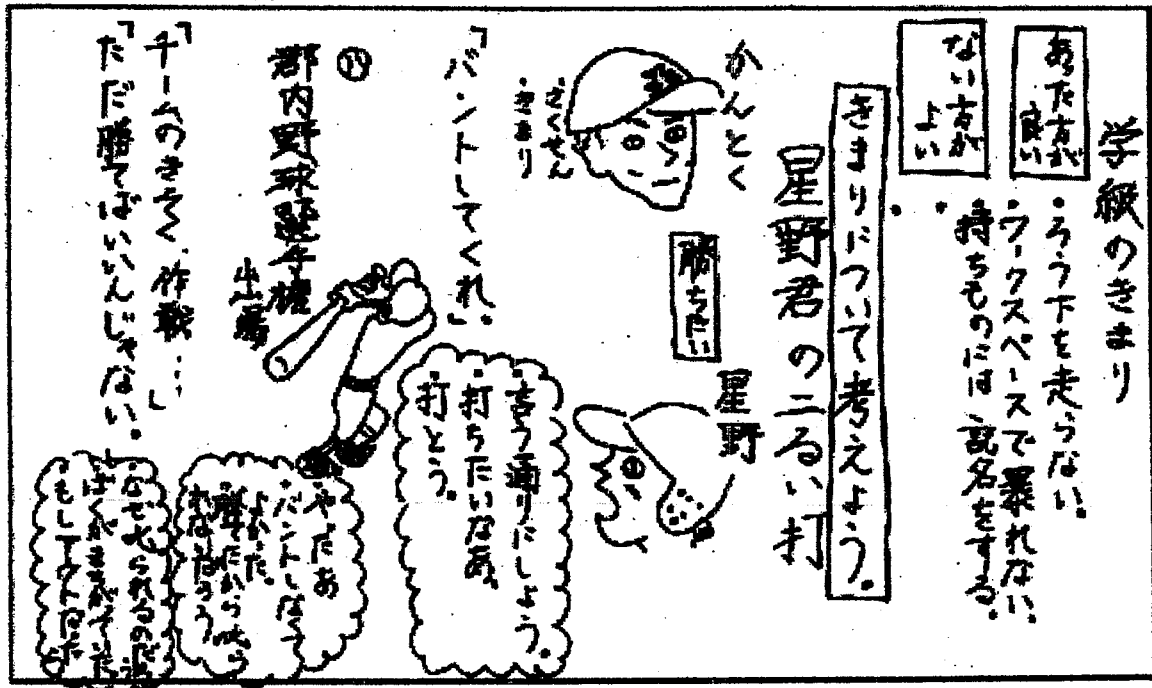
③ 本時の授業で終わることなく、一つの機会としてとらえ、子供たちの変容を見取っていく。指導の至らなかった点の補足や指導も今後の生活の中で繰り返し行っていく。また、ねらいを達成したと思われても、今後の学校生活の中で、きまりを尊重しない態度をとる児童が現れることが予想されるが、その都度、きまりの意義について振り返り、指導の徹底を図っていく。

3 本時の指導

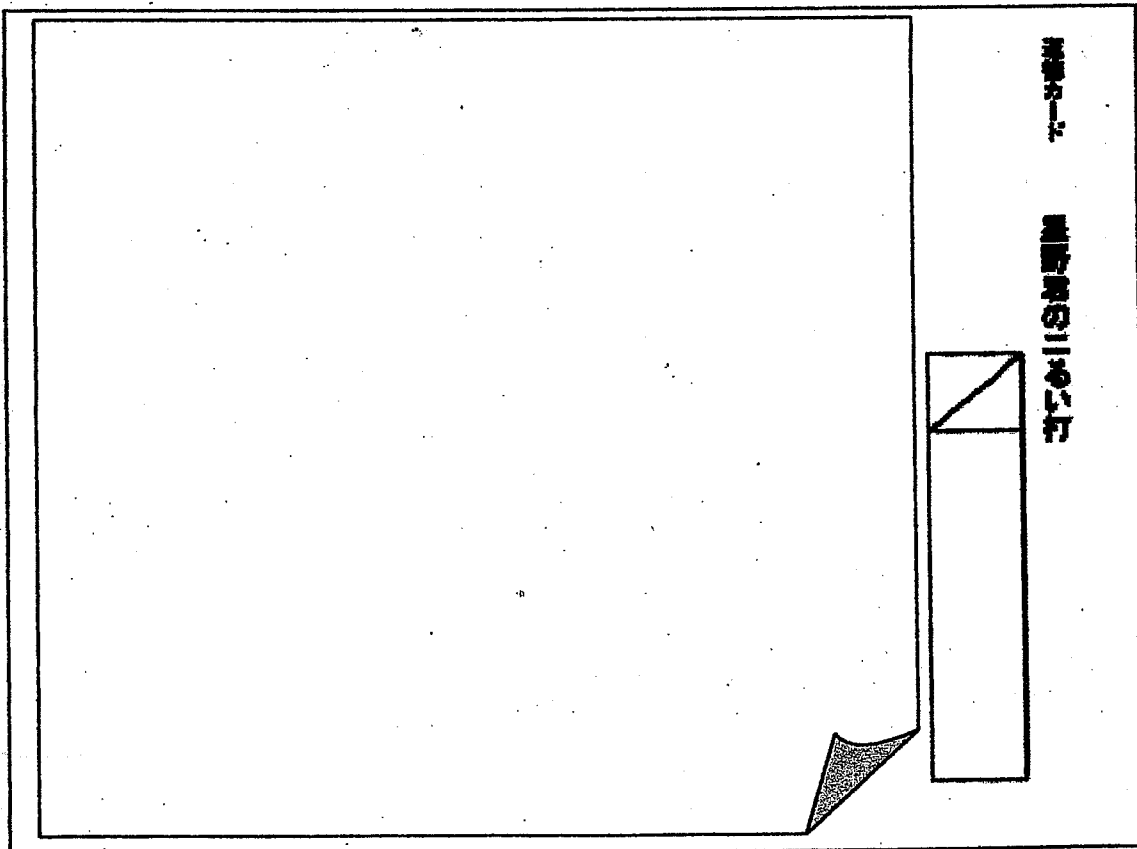
- (1) 本時のねらい きまりや規則の意義を理解し、自分達で決めたきまりは守ろうとする態度を養う。
 (2) 評価規準 きまりは守らなければならないという価値に気づくことができたか。
 (3) 展開

段階	学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点	評価
導入 5	<p>1 きまりについて考える。</p> <p>○ 学級にはどんなきまりがありますか。</p> <p>○ きまりはあった方が良いですか？</p> <p>○ きまりは何のためにあるのだろう。</p> <p>きまりについて考えよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 廊下を走らない。 ワークスペースで暴れない。 良い生活をするためにはあった方が良い。 自由に行動できないのでなくてよい。 自分たちのため。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級生活を振り返り、価値への方向付けを図り、課題をとらえさせる。 	
展開前段 25	<p>2 星野君の二るい打を読んで話し合う。</p> <p>○ 監督に、バントをするように命じられ、「はあ」と曖昧な返事をした星野君はどんな気持ちだったのでしょうか。</p> <p>○ 郡内野球選手権大会に出場が決まったとき、星野君はどんな気持ちだったのでしょうか。</p> <p>◎監督の話聞きながら、星野君はどんなことを考えたのでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 監督の言う通りにしよう。 調子がいいから打ちたいなあ。 命令を無視して打とう。 ぼくの活躍で勝てたことがうれしい。 バントしなくて良かったなあ。 大会でも勝てるように打つぞ。 勝てたから、監督に叱られるはしないだろうな。 打って勝てたのにどうして叱られるんだろう。 きまりを破ったのだから、やはり自分が間違っていた。 良い結果だったから良かったけど、もしアウトになっていたらどうだっただろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 監督の命令に従うべきか、無視すべきか悩む星野君の心中をとらえさせる。 自分の活躍で都内の大会に出場できるようになった星野君の気持ちを十分につかませる。 主人公の気持ちを考えさせる。 多様な価値観がでるように促す。 書く活動を取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発言で評価規準に達したか判断する。
展開後段 10	<p>3 きまりは何のためにあるのか考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ケガや事故を起こさないようにするため。 自分たちのため。 目標達成のため。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標ときまりについて考えさせ、目標達成のために、守らなければならないきまりがあることをとらえさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 書かせた内容で評価規準に達したか判断する。
終末 5	<p>4 教師の話聞く。</p> <p>・目標があり、きまりがあることを話す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> (最近、目標を気にしていなかったなあ。) (みんなで楽しく良い生活を送るためには、きまりがやっぱり必要だな。) 	<ul style="list-style-type: none"> 学級の実態から具体的に話す。 自分の生活を振り返らせる。 	

5 板書計画

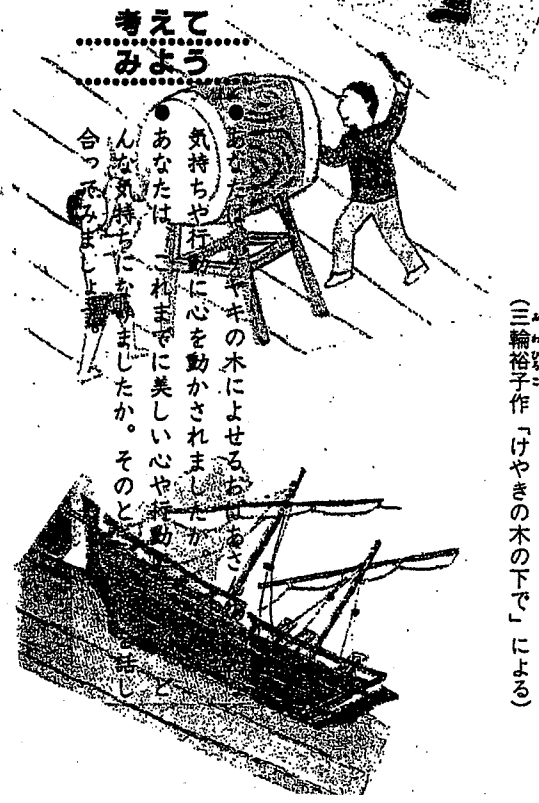


6 道徳カード





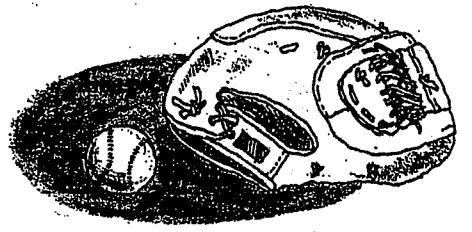
おばあさんが鹿児島県にうつり住み、何年かがたちま
した。
うすにしました。おもちゃにしました。ベンチにしま
した。ふねやたいこなど、いろいろなものになりましたと、
絵や写真といっしょに、ケヤキを持っていったあっちこ
ちの人々から、手紙がよせられました。長野県の孫か
らの便りもありました。
「ケヤキの種が芽を出し、大きくなりました」と。
三輪裕子作「けやきの木の下」による



て
え
み
よう

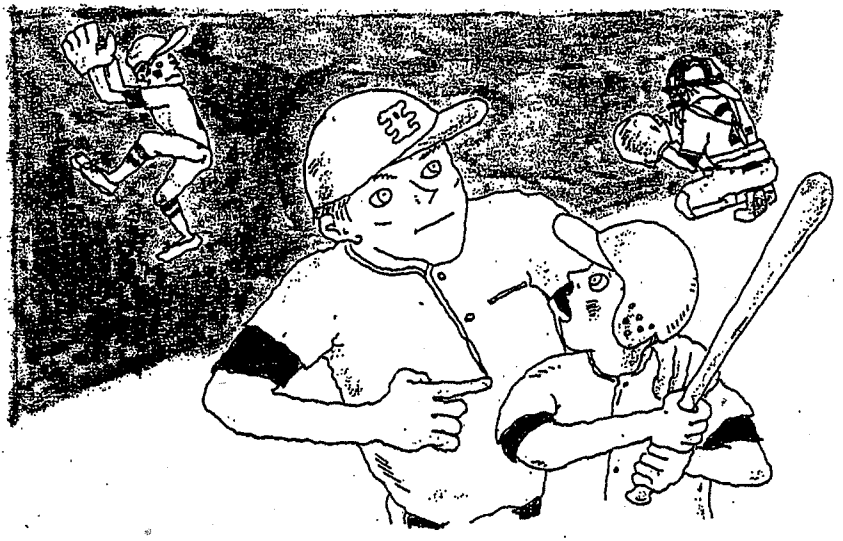
あなただけに心を動かされまし
あなたに、木を美しく心や行動
んな気持ちを、おまじましたか。そのと
合っ

19 星野君の二回打



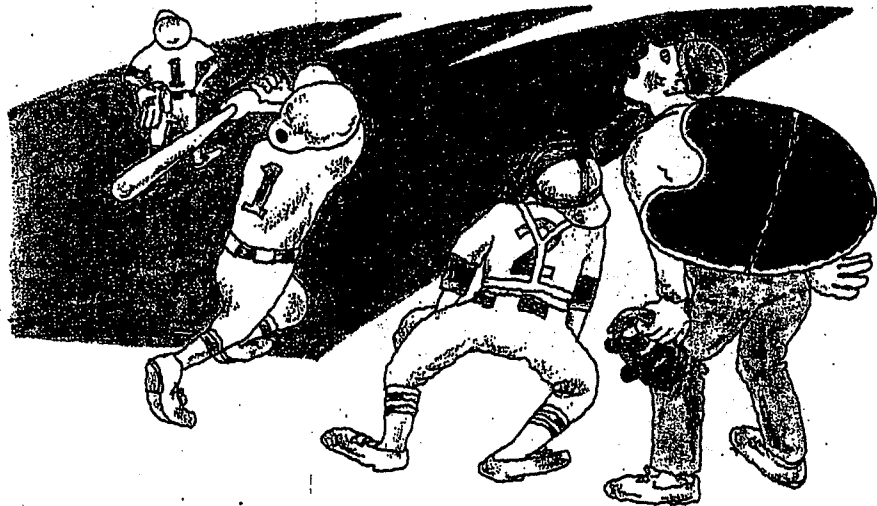
R町のおうえん席は、「わあっ」とわき立
った。グラウンドでは、R町の少年野球チー
ムと、となり町の少年野球チームの試合の真
つ最中だった。七回の表まで同点、今七回の
うら、R町最後のこうげきである。ここで、
最初の打者岩田が、ヒットで一塁に出たの
だ。おうえん席がわき立ったのもわりはない。
続いて、ピッチャーの星野がバッターボツ
クスへ入ろうとしたとき、ベンチにいたかん
とくの別府さんによばれた。

「星野。岩田をバントで二塁へ送ってくれ。
氏原に打たせて、どうしても、かくじつに
一点かせがなければならぬから。」
別府さんは、正面から星野の目を見て、はっ
きりと言った。それもむりはなかった。今日





試合のよく日、選手たちは町のグラウンドに集まり、選手権大会出場にそなえて練習を始めた。そこへ、かんとくの別府さんがすが



星野は、しせいを少し変えた。とたんにピッチャーが第一球を投げこんできた。しかも、星野の最も好きな、近めの高い直球……。星野は大きくふった。当たった……。ボールはぐうんとおびて、あざやかなヒットになった。一塁ランナーは二塁から三塁へ。打った星野も二塁へ。ヒット、ヒット、二塁打だ。R町のおうえん席は、またわき立った。ボールはやつと、ピッチャーのグローブにもどった。

星野は、あまり当たっていなかった。だが、星野は、もともと弱いバッターではなかった。当たれば、そうとう大きなヒットを飛ばすほうだった。だから、この回でめいよを回復しようと、ひそかにはりきっていたのだ。今度はきつと当たる。なんとなくそういう予感がした。それだけに、別府さんの言葉に対して、すなおな返事がしにくかった。「打たしてください。今度は打てそうな気がするんです。」
「打てそうな気がするくらいのことでは作戦を立てるわけにはいかないよ。わかったね。さあ、みんなが待っている。しつかりやってくれ。」
「はあ……。」
と、あいまいな返事をした。

星野は、明るい、すなおな少年だった。しかし、今日のバントの命令だけは、どうしてもききたくなかった。しかし、野球の試合では、かんとくの命令にそむくことはできない。星野は、別府さんの作戦どおり、バントで岩田を二塁へ送るつもりで、バッターボックスへ入った。

ランナーの岩田は、今にも走りだしそうに身がまえていた。そのはりきった動作を見ているうちに、星野はまた、どうしても打ちたい気持ちになってきた。
(打てる。今度こそ打てる。)

かくじつにヒットが打てるならば、むりにバントをする必要はない。



たをあらわした。

「みんな、今日は少し話があるんだ。こっちへ来てくれないか。」

と言って、大きなカシの木かげにすわった。選手たちは別府さんのほうを向き、円になってすわった。

「みんな昨日はよくやってくれたね。おかげで、選手権大会に出場できることになった。みんなに対して心からお祝いを言いたい。だが、一つ大きな問題があるんだ。」

選手たちの目はじつと別府さんの顔を見つめている。別府さんの重々しい口調の中に、なにかあることをだれもがはつきり感じたからである。

「ぼくが先生からたのまれてかんとくになるときに、君たちと話し合ったことをもう一度思い出してみてほしい。ぼくは君たちと相談してチームのきそくを決めた。そして、試合のときなどに、チームの作戦として決めたことにはぜったいにしたがってもらわなければならないという話もした。君たちは、こころよくさんせいしてくれた。それでぼくも、気持ちよく君たちと練習を続けてきたのだ。だが、昨日、この約束がやぶられたのだ。」

自分のことかな、と星野はちらっと思った。しかし、二るい打を打ったんだから、まさかあれがまちがっているとは言われないだろう、とすぐに打ち消した。

別府さんは、星野の顔を正面から見た。

「ぼくは、昨日、星野君にバントで岩田君を二るいへ送るというサインを出した。これがあのとときのチームの作戦だった。星野君は不服らしかったが、とにかくそれを見とめたのだ。いったんみとめておきながら、勝手に打げきに出た。星野君は、ぼくとの約束をやぶり、大きく言えばチームのきそくをみだしたことになる。」

「だけど、二るい打を打って、チームを救ったんですから……。」

と、岩田が助け船を出した。

「いや、いくら結果がよかったからといって、きそくをみだしたことに変わりはない。いか、みんな、野球はただ勝てばいいんじゃないんだよ。健康な体をつくると同時に、だんたいききょうぎとして、チームワークの心を養うためのものなのだ。」

選手たちは、みんな、頭を深くたれてしまった。

「星野君はいいピッチャーだ。しかし、だからといって、ぼくは、チームのきそくをみだした者をそのままにしておくわけにはいかない。」

思わずみんなは頭を上げて別府さんを見た。星野だけがうつむいたままだった。

(吉田甲子太郎作「星野君の二塁打」による)

てえよう 考えよう

- 試合のよく日、別府さんの話を聞きながら、星野君はどんなことを考えたと思いますか。
- きそくやきまりは、なんのためにあるのでしょうか。また、決めるとき、どんなことに気をつけたらよいでしょうか。話し合ってみましょう。